Stichting Dialoog Nederland – Japan - Indonesië
BIC: SNS NL73 SNSB 0927 6534 94
Email: dialoognji16@gmail.com
Website: dialoognji.org

第 19 回日蘭イ対話の会プログラム

2016 年 6 月 4 日（土曜日）

テーマ：「第二次大戦の POW と日本国民との和解は可能か？」

09:45 受付　コーヒー/お茶の用意があります。	
10:15 開会	トン・ステファン(司会者)
10.20 開会の言葉	タンゲナ鈴木由香里
10.35「静かに思いを巡らす場――福岡俘虜収容所第二分所追悼記念碑」	アンドレ・スクラム
10.55「僕の青春は二つの戦争で消えた」	ヘンク・クレイン
11.15　質疑応答	
11:20　休憩	
11.30「私がなぜ捕虜問題に関わるようになったのか」	笹本妙子
11.50「オランダ人被爆者への感謝、そして精神浄化への道」	綿貫葉子
12.05　質疑応答	
12.10　昼食	
13:00 グループ　ディスカッション	
14:30 ディスカッションのまとめ	アヤ・エザワ
15.55 閉会の言葉　＋ 讃美歌　Captives' Hymn	村岡崇光
15.15 閉会	トン・ステファン

講演者の紹介

アンドレ・スクラム	福岡俘虜収容所第 2 分所の元捕虜の子息。日蘭イ対話の会の会計担当。
ヘンク・クレイン	福岡俘虜収容所第 2 分所の元捕虜。第二次大戦後インドネシア独立戦争でさらにを戦った。
笹本妙子	POW 研究会　事務局長。会の設立者の一人。
綿貫葉子	SOO 理事、日系インディッシュ・オランダ人被爆者支援、POW 研究会会員。

NPO 財団法人　日本-オランダ-インドネシア対話の会

ご案内状にもありますように、日蘭イ対話の会の世話人会は 2015 年 12 月に財団という公的な組織として登録されました。過去 16 年間にわたって、世話人会は和解のための会を開催してまいりました。また最近では、オランダだけでなく日本でもさらに活発に活動の輪を広げております。そして、私たちの会の名称にもありますように、インドネシアの方たちとの関係を築く努力をしております。

この財団の理念と目的は、規約に以下のように書かれております。

A　互いを尊重し合い、互いをよく知り、認め合うことによって、東南アジア、特にインドネシアにおける第二次世界大戦とさらにその直後にあったインドネシアの独立の戦いの歴史に関わっていると感じるすべての人々のために、そしてそのすべての人々の間に、過去との和解を招くこと。

B オランダと日本、そしてインドネシアの間に平和の橋を築くこと。

C　上記に関連し、上記に有益なすべての活動を行うこと。

対話の会の世話人会は、実際には 2000 年に、村岡教授ご夫妻、故アドリー・リンダイヤー夫人、故ヴィム・リンダイヤー氏、故エルス・ミヒエルセンーバリヨン夫人、故ハウツヴァールドご夫妻によって、始められました。この素晴らしい功績を覚え、財団理事会は村岡教授ご夫妻にこの会の名誉会員となっていただく栄誉を得ました。しかしながら、それは先生ご夫妻にゆっくりしていただくと言う事ではなく、私たちを常に鼓舞して止まないご夫妻の深い知識と和解への真摯な希望のゆえに、さらに私たちの顧問としてお働きいただくと言う事でもあります。

さらに、この財団は、トン・ステファン氏、ビル・トムソン氏、エデュ・デュマシー氏を顧問として迎えております。

どうぞ今後とも、皆様のお祈りとご寄付でこの会をお支え下さいますよう、心からお願い申し上げます。

NPO 財団法人日蘭イ対話の会

タンゲナ鈴木由香里　代表
ロブ・シプケンス　事務局長
アンドレ・スクラム　会計

開会の言葉

タンゲナ鈴木由香里

みなさま、おはようございます。本日はようこそ日蘭イ対話の会にお越しくださいました。今回は、色々な意味で特別な会となりました。それは、昨年 12 月に私たちの世話人会が Stichting という NPO 法人の資格をいただいたことを記念する会となったからです。日蘭イ対話の会は、2000 年に村岡教授ご夫妻や現在は、天の御国に召された方々が始められ、毎年、和解の会として、続けられてまいりました。私たちは、今後も日本で、オランダで、そしてできることならインドネシアでもこの活動を発展させていきたいと願っています。今日はインドネシアの学生の方々がいらしてくださってます。私たちが、何を求めてどんな事をしているかを是非、見て聞いて積極的に参加していただきたいと願っています。(紹介)

みなさまのお持ちのプログラムにこのＮＰＯ財団について簡単にご紹介しましたので、後ほどぜひお読みください。今は、簡単に皆様に顧問と役員をご紹介させていただきます。まず、村岡教授夫妻、私たちの名誉会員、さらに顧問となっていただきました。さらに顧問として、トン・ステファン、ビル・トムソン、エデュ・デュマシー が助けてくれることになりました。そして、事務局長ロブ・シプケンス、会計 アンドレー・スクラム そして私が代表を務めさせていただきます。

私達は、この新しいＮＰＯ財団という名前にふさわしい新しいロゴを掲げ、またウェブサイトの制作にかかっております。このウェブサイトの完成の暁には皆様にご連絡申し上げますので、ぜひお確かめくださいませ。

さて、私たちがどうしてこのような歩みを踏み出したか、簡単にご説明させてください。先程も申し上げましたが、この和解の会は 2000 年から続けられ、今回 19 回目を迎えます。ここ数年、私たちは。和解というのは一体何なのか、どういうことなのかと色々探っていく中で、和解というのが決してその場限りのものではなく、その和解の経験をさらに共有するために発信をしていくことの重要性に気付いてまいりました。東インドで戦時中何があったかを日本でお話しする和解の会インジャパンも今年で四回目になります。そして過去二年間は長崎の記念碑に多くの時間を割いてきました。このように、積極的に働いていくために、私たちは助成金をいただかなければならないことに気付きました。そして、その助成金を申し込むには、ＮＰＯ財団法人のタイトルが必要となったわけです。そして、現在、助成金が下りるよう祈り願ってます。

さて、今日の会について話させてください。一昨年、和解の力というタイトルで会がありましたが、その時、和解の力は共に働くことに他ならないと申し上げました。そして、それが現実に、オランダで日本でその機会が与えられてきております。しかし、本日は、また一歩下がって、そうは言ってもその和解というのが一体可能なんでしょうか、と言う事を、日本で捕虜となられた方やそのご家族のお話しを通して考えてみたいと思います。また、残酷な日本軍によって傷ついた方々に少しでも寄り添いたいと、邁進していらっしゃる二人の日本の方にも語っていただきます。

現在のオランダの中では、対話の会が始まった当初は考えられなかったような和解の動きが出てきているのは大変嬉しいことです。またその原動力の一部を担っているのが、この日蘭イ対話の会であることを本当に誇りに思っています。先日、コーギス財団主催の One World War Two(一つの第二次世界大戦)という会に出席いたしました。「二度と嫌だ」とでも訳せま

しょうか、Never Again のモットーの下で、「若い世代と(第二次大戦)記念式典」というテーマで話し合われました。昨年の対話の会で、私たちも次世代をテーマにして話し合いましたが、若い世代との関わりは、大変大切なテーマです。そのコーギスのカンファレンスに私のような日本人が出席するというのは、ちょっと勇気がいることでした。ただ残念に思ったのは、若い人たちにどうやって伝えるかという方法論が多く語られていた気がします。しかし、対話の会では、「若い世代に一体何を伝えなければならないか」に焦点を当てて話し合われました。

そして、実はこのことは今日のテーマとも深く関連しています。市民たちは戦争の歴史の中から敵同士だった人たちと和解していけるのでしょうか？和解をするとしたら、一体どういったことが必要不可欠な条件でしょう？そしてもし和解できるとしたら、どういうことが起こってくるのでしょうか？こういった質問を若い人たちにすれば、彼らはきっと喜んで共に考え、彼らの答えを出そうと必死になることでしょう。それを今日私たちは自分でやってみるのです。若い人たちに何を伝えられるでしょうか？

昨年、長崎の元捕虜収容所跡に、そこに捕らわれ過酷な状況下で労働を強いられていたすべての犠牲者のための記念碑が長崎市民の手で建てられました。対話の会も一昨年そのための募金をし、様々な面で深くかかわらせていただきました。それは、日本では実に画期的な出来事でした。長崎市は世界中に知れ渡っている原爆犠牲者の市です。その市民が、そこにあった捕虜収容所に捕らわれていた人々のために祈念碑を建てたと言う事は、とりもなおさず彼らが戦後 70 年にして、自分たちは犠牲者であるが、加害者でもあったということを告白したからです。この記念碑を建てるために尽力された井原さんは、この 8 月 9 日の長崎原爆記念式典で、そのことを被爆者代表として述べたいとおっしゃっています。この対話の会の長崎プロジェクトについては、四時から、本とフィルムの紹介と共に行います。

私はこういう事をオランダに伝えることができることを感謝せずにはいられません。私の国では、現在残念ながら、安倍政権の下で平和憲法が蹂躙され、また自衛隊を軍隊にしほかの国の戦争に加担できるようにしようとする恐ろしい動きがあります。しかし、市民の中には、良心をもって戦争に向き合っている方たちが多くいらっしゃいます。本日そのようなお二方をご紹介できることを大変嬉しく思っております。

時代はどんどん動いていきます。世界はインターネットのネットワークの中で、ますますグローバル化しています。原爆記念がいつまでも自分たちだけの犠牲を語り継ぐとしたら、その独りよがりに他の国々は苦笑することでしょう。先程の話に戻りますが、私たちは一体何を次の世代に伝えていかなければならないのでしょう。自国だけの犠牲を思うだけでなく、世界中の戦争に由来する、悲惨さ、苦しみ、悲しみ、そして、戦争のもたらす人間の残虐性をも伝えるべきでしょう。もし原爆を、終戦を記念するとしたら、世界中で命を落とした 5 千万人のことを追悼すると共に、身体的また精神的に深い傷を負って帰ってきた人々のことを思う時としていかなければならないと考えます。

そういう意味で、今年は 8 月 15 日の戦争解放記念に合わせて持たれる、アムステルフェーンでのオランダ東インド記念式典で対話の会が記念碑に献花させていただけると言う事も、また私がハーグの戦争解放祈念礼拝でお話をさせていただけることも、オランダでは画期的な出来事だと思います。

私がこのスピーチを準備している今、日本のニュースでは、オバマ大統領が広島の平和記念公園を訪れスピーチをしたと騒いでおります。彼がたとえ自分の政権下でほとんど何も成し得なかったにも拘らず、核兵器絶滅を語ってやまないこと、またその

彼を暖かく迎えた広島に思いを馳せました。しかしここにも和解の手があったのです。それはある被爆者がそこで被爆死したアメリカ人ＰＯＷのために記念碑を建てたという事実があったというのです。広島も長崎も核兵器だけでなく原子力発電についても反対の大きな声をあげています。私たちは次の世代に何を伝えるべきでしょうか？

私達市民がつながることで、これからの時代は作られていくべきでしょう。そういったことを実現していくことは、次の世代に残せる貴重な希望の光となるでしょう。目の前にある現実はもしかするとがっかりすることばかりかもしれません。しかし、私たちはそれでも希望を失いません。希望は目に見えるものではありませんが、19 回もこの対話の会が続けてこられたことは、希望があったから可能だったのではないでしょうか？希望の光を私達一人一人が持っていきたいものです。なぜなら、私たちは過去から学んだことを次の世代にリレーする中継地点にいるからです。

本日、あなたが家路につくとき、私達一人一人がその希望の光を放つたいまつを持っていることを少しでも自覚できたら、これ以上の喜びはありません。

特に日本軍の下で苦難をなめた皆さまとそのご家族の皆様、「どうかこの希望の光と共に、あなたの人生を歩んでください。あなたはもう既に十分すぎるほど苦しんだじゃありませんか？」

実り多いカンファレンスをお過ごしくださいませ。

どうもありがとうございました。

福岡第二分所に関する思い出：元捕虜の息子の回想

アンドレー・スクラム

私の父は若い時に海軍入隊を決め、1939 年に蘭領東インドに送られました。彼は 1942 年にオランダに帰ってくるはずでしたが、ヨーロッパが戦争に突入し、さらにアジアでも戦争が勃発したため、オーストラリアに向かうことになりました。オーストラリアへの航海中、彼が乗っていた船は(日本軍に)だ捕された後、マカッサルに強制連行されて、そこで彼をはじめ多くのオランダ軍兵士たちは捕虜として捕らえられました。1942 年 10 月に長崎へ捕虜の移送が始まり、最終的には、父は 1945 年 9 月までそこに収容されました。

父はこの時期のことについて一切私に話してくれなかったうえ、私は母からそのことを話題にしないよう言われていました。私は自分の仕事の関係で日本によく出かけた時期がありましたが、その時、父に一度一緒に日本に行ってみないかと提案したのですが断られました。父は、戦時中、彼を痛めつけた国と向き合う気などさらさらなかったようです。

2009 年に妻と一緒に日本旅行をした折、第二次世界大戦中、俘虜収容所福岡第二分所があった場所を訪ねました。父が過酷な環境の中で約三年間過ごした地を訪れた経験は、私に大きなインパクトを与え、このことが頭から離れませんでした。そして彼がどうしてこの時期のことについて、できる限り口をつぐんでいたのかを理解できるようになりました。

この長崎訪問中に、妻と私は福岡第二分所の元警備員を訪ねる機会を得ました。私たちはとても暖かく迎え入れられ、彼としばらく話をすることができました。そこをおいとまする時に、私は、思わず彼と握手をし、さらに彼とその夫人の暖かなおもてなしに対して敬意の意味を込めてお辞儀をしてしまいました。しかしながら、父だったら考えもしなかったようなことをしてしまったと言う事に、その後ずっと悩んでしまいました。このことは、父のことを思い出すたびに、私を悲しい思いにさせ、その悲しみから私は逃れることができず、この記念碑の除幕式まで、辛い時を過ごしていました。

この 2009 年の私達の長崎訪問のすぐ後に、記念碑建立についての話が始まりました。最初から、私はこの記念碑建立に心惹かれ強い関心を持ちました。なぜなら、この記念碑建立の構想の中には、戦争中に収容所や造船所で命を落とした方たちだけを追悼するのではなく、福岡第二分所で捕虜とし悲惨な状況の中で収容されていたすべての人たちをも犠牲者として覚えるという内容が最初からあったからです。

この記念碑はその構想を現実のものとし、私を喜びに満たし(私自身も色々関わることができたので)達成感を与えてくれました。この記念碑は、長崎の一般市民の方々が考え付き、実現してくださいましたが、その記念碑に彫られてある文章に見るように、私の父を含めた福岡第二分所の全ての犠牲者に手向けられた尊敬の念を顕しているからにほかなりません。

長崎のキリスト教徒の会衆によって除幕式の前日に祈念礼拝が収容所跡で捧げられました。この礼拝と除幕式およびその後のプログラムに、私は深い感銘を受けました。そして、私に過去の事柄にけりをつける勇気と力を与えてくれたのです。父を含めた全ての犠牲者を祈念し、彼らに敬意を表明するこの記念碑を私は、心から誇りに思います!

この除幕式には、福岡第二分所に特別な想いを寄せ、それぞれの歴史を背負ってきたオランダ人のグループも参列しました。このグループは私をその一員として支えてくれ、またこの活動に携わる私を力強く後押ししてくれました。しかし、この記念碑の建立は小松氏や井原氏はじめ多くの方々の甚大な働きが無かったなら決して実現しなかったと言う事も、はっきり認識しております。さらに、POW 研究会、とりわけ、笹本妙子氏と田村佳子氏のご尽力に感謝と賛辞を贈ります。彼らの活動は、元捕虜たちとその家族、さらに次の世代の人々にとって、非常に深い意味を持っています。最後に、私の個人的な状況も含めて、第二次大戦に関する和解のプロセスに多大な貢献をされていらっしゃるタンゲナ鈴木由香里氏に、そして彼女の人となりに、感謝と敬意の言葉を付け加えます。

(翻訳 タンゲナ鈴木由香里)

僕は青春を２つの戦争で失った

ヘンク・クレイン

私は 1924 年 10 月 27 日に西ジャワ州のバンドンで生まれました。私の父はモニケンダム[1]出身のトトク、つまり純血のオランダ人でした。父は蘭印軍の音楽隊員で、当時バンドンに配属されていたのです。私の母は私が生まれてすぐに亡くなったのですが、スメダン[2]出身のスンダ人でした。この頃のことは断片的にしか思い出せません。こちらの写真は私が３歳の頃のものです。私の叔母と姉たちと一緒に写っています。

（写真 1: ３歳頃）

私たちはパンガラン通り（Pangaranweg）に住んでいました。毎朝小学校までかなりの距離を歩いて通い、そして毎晩また同じ距離を歩いて家に帰りました。いつもミリアムという名前のスンダ人の少女と一緒に歩いていました。

私たちが住んでいた通りには、スンダ人の一家も住んでいました。その家の娘チンタワティと、息子ダドは私のよい友達でした。ダドと私はいつも一緒にいました。しかし、私たちがバンドンを離れてから、この一家と再び会うことはありませんでした。もしかしたら私たちはその後敵対関係になっていたのかもしれません。幼い時に母こそ亡くしましたが、私は幸せな子供時代を過ごしました。

私が５年生の頃、私たちはメースター・コルネリス（Meester Cornelis[3]）という、バタヴィア、現在のジャカルタの郊外にある町に引っ越しました。そして小学校を卒業した後は職業学校に入学しました。

この頃、日本は既に東南アジアでいろいろ悪さをしていました。ドイツはオランダを占領し、日本はさらに進攻していきました。真珠湾の攻撃の後フィリピンが占領され、ビルマ、マレーシア、最後にシンガポールと続きました。

[1] オランダ、アムステルダムの北にある町。
[2] バンドンから北東に 45km ほどのところにある町。
[3] 現在は Jatinegara という名前。

私はこの頃には既にオランダ海軍に志願していました。私の最初の訓練はグーベン海軍兵舎で行われ、およそ３か月続きました。これがその頃の写真です。きちんと制服を着ています。これは海軍では毎日検査されました。

（写真 2: １６歳の頃、海軍兵として）

それから専門教育のためにスラバヤ号に配属されました。この船は 1908 年に装甲艦デ・ゼブン・プロビンシエン号として造られましたが、1933 年に起きた反乱の後改名され、砲艦となりました。稼働できるボイラー室は１つだけだったのですが船を動かすことはでき、また 28 センチの大砲はもうすぐやって来るであろう敵の上陸部隊を脅かすことができました。私たちは東ティモールの権限譲渡の時にはその場にいました。そしてその後はジャワ島沿岸の警備をしていました。

（写真 3: Hr.Ms.スラバヤ号）

オランダの蘭印防衛作戦は成功できなくはないはずだったのですが、イギリス軍が指揮を執ることになり、全く異なる戦略を取ったことから失敗となってしまいました。彼らが戦艦２隻を失ってから、日本の攻撃を食い止めるため、大急ぎで連合艦隊が編成されました。1942 年 2 月 18 日にはスラバヤ港が爆撃され、爆弾が命中したスラバヤ号は沈没してしまいました。なぜ日本軍がより新しい戦艦ではなく、スラバヤ号のような古い粗末な船をわざわざ攻撃したりしたのか、未だに理解できません。

この頃私の父が亡くなったのですが、戦況が緊迫していたため休暇をもらうことができず、父と最後に一目会うことも、葬儀に出席することもできませんでした。

2 月 27 日にはデ・ロイテル号の係留ロープを外すのを手伝いました。信号旗が揚げられ、そして下ろされ、号笛や汽笛などが鳴り響いていました。そして船は海戦に向け出航しました。私にはカレル・ドールマン少将[4]がブリッジに立っているのも見えました。しかし彼らのほとんどは、二度と帰ってきませんでした。帰ってきたのは溺死した何人かだけです。海戦は、私達にとって悲惨な結果となりました。

上層部からは避難するよう命令が来ました。私たちは列車でチラチャップに移動し、そこで KPM の船、ダウマール・ファン・ツイスト号に乗せられました。オーストラリアに向かうためです。しかし、オーストラリアにたどり着くことはできませんでした。私たちは日本軍の飛行機に発見され、その先には日本軍の戦艦数隻が私たちを待ち構えていました。私達はこのうちの一隻に乗せられ、マカッサルまで連れて行かれました。マカッサルにはほかの捕虜たち、オランダだけではなく、イギリス、オーストラリア、アメリカの捕虜も収容されていました。そのおよそ半年後、私たちの大半は日本に送られることになりました。ただしその時はどこに送られるのか全く知らされていませんでした。そして私たちは長崎に到着しました。到着したのは冬で、非常に寒い時期でした。私たちは福岡第２分所に収容されました。そして、川南造船で働かされることになり、私は鋲打ちになりました。作業は単調で絶望的、心身をむしばみ、そして危険なものでした。一度、私と一緒に作業していた人の上に鋼板が落下し、足を切断しなければならなくなった事故もありました。

最初の一年は日本の戦勝のニュースが続いていましたが、だんだんアメリカ勝利のニュースも入ってくるようになりました。日本はその領域を失い始めていました。そして最初の空襲警報が出されました。B-29 が何機か上空を飛んでいましたが、高射

[4] オランダの海軍軍人。ABDA 艦隊を率いたが、スラバヤ沖海戦で戦死。

砲で迎撃するには高度が高すぎ、そして「警報解除」の信号が出て、また仕事に戻りました。誤報だったわけです。このようなことが何日か続きました。しかし、1945 年 8 月 9 日、造船中の船の下で作業をしていたとき、また空襲警報が出されたのです。この時私は「また警報か」と思い、船の下にいたまま、昼ご飯を食べ始めることにしました。

しかしその時、地面が動き始めたのです。そして非常に強い閃光が続きました。周り中がとても明るくなったのです。直後にものすごい轟音があり、それから爆風が続きました。そして、そのあとは、全く何もなし。音一つせず、辺りは暗くなっていました。その時どこからか人の声が聞こえ、私は隠れていた場所から這い出してきました。声の主は同僚たちでした。その時、誰かが「危ないぞ、戻れ、戻れ！」と叫び、上を指しました。天窓のガラスが空圧ではずれ、大きなガラスの破片が滑り落ちて来ていたのです。ガラスの落ちる音が聞こえなくなったところで船の下から這い出し、上へ、ドックの外へ向かいました。既に午後遅くになっていました。上は大変な混乱状態でした。日本人たちは互いに叫び、どなりあっていました。私たちの見張りも興奮状態でしたが、それでも私たちに集合場所に行くよう指示することはできました。

そして、その集合場所から見えたのは、いつもの美しい長崎ではなく、まさに火の海、大小さまざまの火事でした。そして大量の煙、見るに堪えない光景でした。大きい、不気味な煙の柱が町の上空に浮かび、それはますます大きくなり、高く上がり、炎を吐き出していました。非常に恐ろしい光景です。上の方は外に向かって広がっていき、その形はまるでキノコのようでした。

私たちは行列になって収容所に戻りました。収容所も悲惨な状態でした。空圧によって外壁は曲がってしまい、病室の屋根の一部は上に押し上げられてしまっていました。

その後の数日は収容所の中にとどまっていました。非常に緊迫した日々でした。見張りたちは、アメリカ軍が侵攻してきたら捕虜は殺されることになる、と何度も繰り返していました。何が起こっていたのかはわかりませんでしたが、戦争の終わりが近いということははっきりしていました。

（写真 4: 福岡第 2 収容所から出発）

私たちはアメリカの上陸用舟艇で米病院船ハーヴェンに運ばれ、ここでメディカル・チェックを受けました。その後航空母艦で沖縄に運ばれ、そこから飛行機でマニラに移動し、ここで体力を回復させました。この地で、自由な身で、私は 21 度目の誕生日を祝いました。

残念ながらこの体力回復期間は長くは続きませんでした。2 か月後には、戦争を生き延びた数少ない船の一つ、ヤコブ・ファン・ヘームスケルク号に配置されることになりました。これがその頃の私の写真です。水兵帽は斜めにかぶり、胸当ては下に下げ、いっぱしの大人になったつもりでいました。

（写真 5: Hr. Ms.ヤコブ・ファン・ヘームスケルク号にて）

バタヴィアの港に滞在していた時、私は下の姉と再会しました。姉はここで、分散した家族を探し、再会させる RAPWI という機関で働いていました。この写真はその時に撮影されたものです。そして、スラバヤの港に滞在していた時には上の姉と再会しました。桟橋を歩いている時に、義兄が座って釣りをしているところに出くわしたのです。

（写真 6: 下の姉と共に）

当時、蘭印は平穏とは程遠い状況でした。私達の任務は巡視、密輸品や密売品の押収、そして村々を調査することでした。私はスループ船の機関士でしたので、上陸の時には一緒に行きましたが、私は船に残っていました。発砲音を聞いたり、人々が逃げていくのを見たりしたことはありますが、撃たれたことはありません。

物資補給の状況はひどいものでした。上陸隊は機会があればイノシシやシカを撃ったりもしました。これらを船のデッキに下げて干し、新鮮な肉を手に入れたのです。夜の警備の時にはこの肉を少し切って、スチームパイプでローストしたりしました。これがたまらなくいい匂いで、機関士の役得というものです。衣類の調達状況もあまりよくなく、私はマニラでアメリカ軍からもらったカーキのユニフォームを使い続けざるを得ませんでした。オーストラリアに行く際、私たちは青い服を身につけなければならず、持っていたカーキの制服の一つを青いものと交換しました。

その後私はヤン・ファン・ブラーケル号に配置換えになりました。この船はもともとは機雷敷設艦でしたが、私が配属した時は掃海艇の母艦として使用されていました。戦争が終わった後、インド洋には我々や日本軍が配置した機雷がたくさん残っており、安全に航海するためにはこれらの機雷を除去する必要がありました。小さな、今の技術と比べたら非常に原始的な設備しかない当時の木製の掃海艇で行う、危険な作業でした。デ・ワルヘレン号はこの作業中に日本軍の機雷に接触し、船は沈没、乗員 3 人が死亡、さらに多数の負傷者を出しました。

この頃の数年間、私は全く休暇を取りませんでした。海軍の保養所がバンドンにあったので、もう一度そこに行きたいと思っていたのですが、海軍は当時も技術職員が慢性的に不足していたのです。

最後に私はデ・バチャン号に配置となりました。1946 年までオーストラリアのものだったコルベット艦です。この船でも巡視業務は引き続き行われました。時と場合によっては砲撃も行われました。点検の際ボイラーの状態が非常に悪く、修理のためにオランダに戻らなければならないことが判明しました。こうして、23 歳の時に母国に向かって航海する命令が出されたのです。母国といっても、私にとってはまだ一度も訪れたことのない国でした。

インドネシアには既に戻ったことがあったのですが、昨年初めて、福岡第 2 分所があった所に建立された追悼碑除幕式に出席するため、70 年ぶりに長崎を訪れました。

(翻訳：中沢陵子)

私がなぜ捕虜問題に関わるようになったのか

笹本妙子

皆さん、こんにちは。POW 研究会の事務局長を務めております笹本妙子です。
私は東京近郊の町・横浜に住んでいます。我が家の近くに「英連邦戦死者墓地」という広大で美しい墓地があります。私が捕虜問題について関わるようになったのは、この墓地との出会いがきっかけでした。

この墓地の存在を最初に知ったのは、もう 40 年近く前、今の家に引っ越してきてからです。それまで私は、横浜にこのような墓地があるとは全く知りませんでした。一体この墓地は何だろうと、恐る恐る中に入ってみると、無数の墓碑が整然と並び、周囲は美しい花々に彩られていました。私は墓碑を 1 つ 1 つ見ていき、不思議に思いました。どの人も 1942 年から 45 年にかけて、つまり太平洋戦争中に亡くなっていたからです。「戦死者墓地」という名前がついているけれど、日本本土で地上戦があったわけでもないのに、なぜこんなに大勢の英連邦の兵士たちが遠い異郷の墓地に葬られているのか？　しかし墓地内には何の説明版もありません。
以来、会う人ごとにこの墓地の由来を聞きましたが、私の疑問に答えてくれる人は誰もいませんでした。図書館でも調べましたが、この墓地について書かれている本は 1 冊もありませんでした。そうして 20 年近い歳月が流れて行きました。

ところが 1997 年夏、この墓地で日本人による慰霊祭が行われたという新聞記事を読み、ついにわかりました。ここに眠っているのは捕虜として日本で亡くなった人々だったというのです。え、捕虜？　あの戦争中、日本に捕虜なんていたの？　私は驚いて、慰霊祭の主催者の 1 人である教授の話を聞きにいきました。すると先生は何本かのビデオを見せてくださり、日本が捕虜に対して何をしたのかという話を、長時間熱っぽく語ってくださいました。泰緬鉄道を舞台にしたビデオには、骸骨のように痩せ衰えた捕虜の姿、鉄道沿線で掘り起こされた夥しいアジア人労働者の遺骨、老いた元捕虜たちが日本への怒りと憎しみを露わにする姿が映し出されていました。

私は脳天を打たれたようなショックを受け、自分の無知を深く恥じました。私たちは原爆や空襲などの被害については知っていましたが、相手国やアジアの国々に対してこんなに酷いことをしたとは全く知りませんでした。私は日本がアメリカやイギリスやオランダやオーストラリアと仲良くしていると思っていましたが、日本をこれほど激しく憎んでいる人たちがいたとは知りませんでした。なぜこんな大事なことを知らなかったのか、私たち日本人はこの歴史を知らなければいけない――私はそう強く思いました。そしてまずこの墓地に眠る人々に何があったのかを自分で調べようと思い立ちました。

歴史の専門家でもない私にとって、これはとても無謀な企てでしたが、幸運にも同じ志を持つ田村佳子さんと出会うことができました。彼女もかつてこの墓地のそばに住んだことから捕虜のことに関心を持ち、私より早くから活動を始めていたのです。そして英語がとても堪能でもありました。私は心強いパートナーを得、以来、彼女と二人三脚で調査や元捕虜との交流に取り組むようになりました。

当時、ちょうど戦後 50 年の後だったので、捕虜関係の本も少しは出版されていることがわかりました。また、私たちと同じような志をもって捕虜や抑留者や戦犯裁判の問題に取り組む人びとが、少数ながら各地にいることもわかり、彼らと協力し合えば、きっと良い仕事ができると確信しました。2002 年、捕虜・民間人抑留者・戦犯裁判などに関する調査研究と元捕虜・家族との交流を活動の両輪とする「POW 研究会」を発足させました。スタートメンバーは 20 名弱でした。共同代表には、この分野の研究の第一人者である内海愛子教授と、当時高校教師だった福林徹氏が選ばれ、私は事務局長を務めました。
メンバーは日本各地に散らばっていたので、普段はメーリングリストを通して意見や情報を交換し合い、元捕虜や家族が来日した時には、各地のメンバーが連係プレーでお世話しました。

ここで英連邦墓地についてちょっとご説明しておきますと、太平洋戦争中、日本には約 36,000 人の捕虜が連れてこられ、全国 130 か所の捕虜収容所に収容され、炭鉱や金属鉱山、造船所、軍需工場、港などで過酷な労働に従事させられました。その結果、終戦までに約 3,500 人が死亡しました。このうち、イギリス、オーストラリアなど英連邦の兵士約 1,720 人の遺骨は、終戦後、横浜の英連邦墓地に埋葬されましたが、アメリカとオランダの兵士たちの遺骨は母国に持ち帰られま

した。ただし、英連邦墓地の納骨堂には、例外的にアメリカ人 48 人とオランダ人 21 人の遺骨が納められています。彼らは、悲惨な輸送船の旅で、九州の門司港に着いた直後に亡くなった人々です。一度にあまりに沢山の死者が出たため一緒に火葬され、遺骨が識別できなくなって、この納骨堂に合葬されたのです。

さて、2003 年、共同代表の福林氏が、日本国内で死亡した捕虜約 3,500 人の名簿を東京の国会図書館で発見しました。長い間探し求めていたこの名簿によって、英連邦墓地に眠る捕虜兵士 1,720 人の死亡地と死因がほぼ明らかになりました。私はこれをもとに、まず墓地被葬者のリストを作り、次に会の仲間と協力して全死亡者の収容所別のリストを完成させました。2004 年、これらを会のウェブサイトで公開すると、国内外の新聞で報道されて大きな反響を呼び、会には、「このリストによって初めて父の死の経緯を知ることができた」などと、世界中から 100 通以上ものメールが寄せられました。

同じ年、私は田村さんの協力を得て英連邦墓地に眠る人々の生と死のドラマを、『連合軍捕虜の墓碑銘』という本にまとめました。本に盛り込めなかった事柄は、捕虜収容所ごとのレポートにまとめ、会の HP に掲載していきました。

2006 年、私たち POW 研究会は、キャンベラのオーストラリア国立大学で、同大学のアジア太平洋研究所との共同セミナーを開催しました。同国の元捕虜の体験談や研究者の発表を聞くとともに、当会からもそれぞれの調査研究や活動の成果について発表しました。この経験は、その後の日豪の相互理解と交流に大きく貢献しました。

日本政府は 1995 年頃からイギリスの元捕虜とオランダの元捕虜や抑留者を日本に招待する事業を行ってきました。私は田村さんと共に、彼らのレセプションによく招かれましたが、オランダの人びとに接して強く感じたのは、彼らの心の傷が他の国の元捕虜たちよりさらに深く複雑なことでした。それは、父親は捕虜となり、母親と子どもたちは民間人抑留所に送られ、家族ぐるみで被害を受けたからだとわかりました。とりわけ幼い子ども時代に受けた傷は、彼らの成長に大きな影響を及ぼしたことでしょう。

日本政府は 2010 年からアメリカとオーストラリアの元捕虜と家族を招待する事業も開始しました。私たち POW 研究会は、彼らがいた捕虜収容所についての情報を提供したり、跡地訪問に同行したりするとともに、市民を対象とした交流会や、小学校や大学での交流会をアレンジしてきました。そうした機会を通して、捕虜や抑留者の問題に関心を持つ人も少しずつ増えていき、新聞やテレビなどのメディアで報じられることも多くなりました。また、来日した元捕虜や抑留者の方々は、戦時中とは全く違う今の日本の姿を見、多くの日本人の親切や優しさにふれて、それまで抱えていた日本に対する怒りや憎しみから解放され、心を癒されて帰って行きます。彼らのそうした変化に立ち会えた時、私たちもまた幸せな気持ちになります。

2010 年、オランダ在住メンバーの前川佳遠理さんがチームリーダーとなり、日本軍の捕虜として死亡した蘭印軍兵士の銘々票を英訳するプロジェクトに取り組みました。銘々票とは、日本軍によって作成された捕虜の個人カードで、氏名、生年月日、国籍、所属部隊、階級、捕虜となった日と場所、移送歴、病歴、死亡日、死因、埋葬地などが記されています。この銘々票は戦後、日本政府から各国政府に引渡され、オランダの場合は約 47,000 枚がオランダ国立公文書館に所蔵されています。捕虜の遺族の中には、父や兄や祖父が捕虜としてどのような経緯をたどったのかを知らない人も多いので、この銘々票は貴重な情報源となるのですが、日本語で書かれているため、読むことができません。そこで前川さんはこの銘々票を英訳することを発案し、POW 研究会メンバーと共に、まずは蘭印軍兵士の死亡者約 7,200 枚の翻訳に取り組みました。2011 年 8 月、翻訳された銘々票のデータベースがオランダ国立公文書館のウェブサイトで公開されました。この銘々票のページは貴公文書館サイトでアクセス数トップを誇っているとのことです。それだけニーズがあったということだと思います。その後、私たちはオランダ海軍約 2,000 人の銘々票翻訳にも取り組み、これもいずれ公文書館のサイトで公開されるとのことです。

3 年前からは、タンゲナさんが「対話の会 in 東京」の開催にも協力しています。オランダの捕虜や抑留者に関する歴史を日本の若い世代に伝えたいという、タンゲナ由香里さんの願いに応えて、私たちは知り合いの大学教授や学生たちに参加を呼びかけました。映画の上映、学識者の講演、そしてオランダに住むタンゲナさんの体験談など、日本の若者たちにとっては初めて知ることばかりですが、彼らの心に確かな何かを植え付けているように思います。

オランダと縁の深い長崎には、福岡第 2 分所、福岡第 14 分所という 2 つの捕虜収容所がありました。この 2，3 年、これらの収容所を巡って嬉しい出来事が続きましたが、第 2 分所については先ほど Schram さんや Tangena さんから詳しい報告があり、第 14 分所については Yoko Huijs さんがこれからお話になると思うので、私からは省略します。

英連邦戦死者墓地との出会いをきっかけに捕虜問題に関わり始めてちょうど 20 年が経ちました。私は 3 年ほど前に仕事をリタイアし、今は自分の生活の大半を捕虜関係の活動に費やしていますが、自分の後半生がこのようになろうとは夢にも思いませんでした。しかし、この活動を通して多くの素晴らしい人々に出会い、多くのことを学び、得難い体験をしました。
POW 研究会のメンバーは今や 70 人を超え、オランダにも 4 人の会員がいますが、捕虜や抑留者に関する史実は日本ではまだまだ知られていません。これを次世代に伝えるために、これからもお互いに協力し合いながら、頑張っていきたいと思います。

ご清聴いただき、ありがとうございました。

オランダ人被爆者への感謝、そして精神浄化への道

綿貫葉子（Yoko Huijs-Watanuki）

わたしは 1994 年からここオランダで蘭印系オランダ人の方たちと交流を持つようになり、特に大戦中インドネシアで日本人の父親を持って生まれた JIN や財団櫻のメンバーたちのために父親捜しの協力活動に関わってきました。2008 年からは長崎において原爆を体験した元捕虜の方たちを探し出し、その後の交流を続けています。2012 年にはオランダ公益財団法人アジア太平洋戦争 日本関連史資料および学術連絡支援財団（オランダ語で Stichting Oorlogsgetroffenen in de Oos、略称 SOO）が設立され、わたしはその一理事として戦後処理関係の活動を継続中です。

オランダに在住するようになってから最初の数年間、わたしは日本から遠く離れたこの国で生きる意味を自問していました。そしてこの蘭印系オランダ人のみなさんと出会ったとき、わたしはここで日本人として、自分の祖国日本が起こした戦争で心身ともに深く傷ついた人たちのために何かやらねばならないことがある、だからここに来たのだろうと気づかされました。過去 22 年間みなさんがわたしが日本人であるにもかかわらず暖かく接してくださったことに心から感謝する次第です。

さて、日本には「被爆者援護法」が施行されており、被爆者手帳所持者は健康管理手当てなどを申請により支給される権利を与えられています。オランダに関しては 1980 年代にある元捕虜が被爆者手帳を受け取ったという記録があります。法の改正により 2009 年にはショルテ（Scholte）氏が初めて在蘭日本大使館を通して手帳を受け取り、さらに 2011 年と 2014 年にはシュカウテン（Schouten）氏とブッヘル（Büchel）氏がそれぞれ手帳を交付されました。シュカウテン氏は

残念ながら 2012 年 11 月に死去されましたので、現在手帳を所持する被爆者はショルテ氏とブッヘル氏の 2 名のみです。わたしはこのおふたりととても親しい交流をさせていただいています。

ブッヘル氏は手帳を受け取った数か月後に 3 人の娘さんたちと長崎を訪問しました。わたしはブッヘル氏のご好意でその期間中通訳とコーディネーターとして同行させていただきました。一行は長崎で多くの人たちから心からの歓迎を受け、特に平野伸人氏と POW 研究会のみなさんは一行の訪問が有意義なものとなるよう事前準備に多くの時間と尽力を費やしてくださいました。平野氏は被爆者の母を持つ被爆者二世で、長年日本内外で被爆者の人権と生活改善のために多大な貢献をされています。この平野氏はブッヘル氏に日本国を相手取り慰謝料請求のための訴訟を始めてはどうかと勧めました。在外被爆者は 2003 年の法改正後も日本に行かなければ手帳申請ができず、被爆者援護の対象外に置かれていました。それは在外被爆者への差別であるとして、ブッヘル氏は大阪の弁護団の一人である向山弁護士に一切を委任して提訴することを決意されました。氏にとってこの訴訟は慰謝料を受け取るためというより、長崎で強制労働させられ被爆した元捕虜全員の存在と心身的被害を日本に認めてもらうための象徴的な行為でした。今年 2 月 29 日、長崎地方裁判所はブッヘル氏と日本政府との間に和解が成立したとし、日本政府は氏に損害賠償を支払うこととなりました。これは被爆した元捕虜と国の間で慰謝料支払いに関する和解が成立した初めてのケースです。過去 2 年間この訴訟のために真摯に活動してくださったのは大阪の弁護団のひとり向山知弁護士で、この弁護団はこれまで主に日本と韓国の被爆者のために数多くの訴訟に関わってきました。和解が成立した日、わたしはブッヘル氏のもとに向かい朗報を伝えました。そのとき彼はこの損害賠償金の一部を POW 研究会と弁護団、そしてわたしの財団 SOO に寄付するので、これからの活動継続に役立ててほしいとおっしゃってくださいました。この深い愛情の籠ったご厚意とわたしたちの活動への評価にわたしはただただ感謝するばかりでした。ブッヘル氏はすでに長い間過去の出来事から距離を置き、ただ前向きに生きる、という姿勢を取ってこられたとおっしゃいます。この生き方が彼の鋭利な知性と健全な魂を保持する秘密の力です。ブッヘル氏はもうすぐ 96 歳になられます。これからもお元気で人生を謳歌されますようお祈りしております。

わたしは地域で訪問看護に従事しています。仕事柄臨終の場に立ち会うことも何度もあります。高齢者や病気の人たちを看護する中、いつも心から祈ることはこの人たちができるだけ平安な気持ちで、痛みも不安もなく最期を迎えられますようにということです。このことはもちろん私自身のことにも当てはまります。誰でもいつかは死を迎え、その時がいつくるか誰にも分かりません。わたしが生と死を考えるとき、オランダの蘭印系のみなさんのなかにまだかなり人生に対する不満や恨みを抱き続けている人がいるのではないかと心が痛みます。それがわたしの思い過ごしであればそれでいいのですが。もし戦後 70 年も過ぎた今でもそういう方たちがおられるとしたら、どうぞここで少しでもご自身とご家族のために何ができるかお考えくだされば幸いです。考え方を変えることで心の中の安らぎが得られれば最高だと思います。わたしたちの人生はとても素晴らしいものです。ネガティブな思いで満たすにはあまりにももったいない。難題や苦難は多いのですが、それでもわたしたちはこの地球で幸せになるために生まれてきたのだとわたしは信じています。わたしたちは幸せになるためにはどうしたらいいかという課題をもらって生まれてきたと考えてもいいかも知れません。あちこちに痛みもあるし生きることは苦労だらけで・・とつい愚痴を言いたいこともあります。そんなとき、ため息の代わりにちょっとでも微笑みを見せることができれば、周りの人たちはそれにどう対応するでしょうか。「ついてないな」という代わりに「いやーついてるよ！」と言ってみれば、わたしたちの魂は喜んでくれるのではないでしょうか。ショルテ氏は「僕はきれいな女性が大好きでね。だから今でも若いんだよ！」ととても幸せそうに笑います。ブッヘル氏は「いやー、また新聞記者にインタビューされた。有名人になりすぎて仕方ないよ！」と笑いを飛ばします。彼はもともと目立つのが嫌いな控えめな方なので、そのユーモアがなんとも心地よいのです。このおふたりやここにご参加のみなさんで戦争体験があるにも関わらず健全な心と体を維持されている方たちにわたしは常に尊敬の念を抱いています。悲惨で非人道的な扱いをされれば誰しもが心に深い傷を負います。しかし中にはそのような体験をしながらも持ち前の強い生命力で、この人生において何かを達成しようとしている人たちもたくさんおられます。このような方たちを知る中で、わたしは神という存在が愛と光、そして忍耐をわたし

たちに与えてくれているのだと思えてなりません。ここで神ということばを使いましたが、これはアラブ語のアラー、ヘブライ語のヤハウェ、日本語のアメノミナカヌシなどと同じです。これらの言葉は宇宙の中心に存在する大きな力を表しています。この力が宇宙すべてに存在するありとあらゆるもののエネルギー源だとご理解ください。わたしたちはこの完璧な創造主に作られたとはいえ、まだ成長の段階にいます。それが嫉妬や怒り、恐怖といった感情に影響されやすい理由です。また自分や周りの人間が嫌いになることもありますが、それは自分自身に不満を抱いていているという理由が根底にあるのではないでしょうか。そういった場合は自分をそして周りを許すという行為が大きな助けになることでしょう。ポジティブな言葉を耳にすれば誰しもが心地よくなります。周りの人たちを褒めて彼らが喜ぶことをすれば、自分自身も幸せになります。なぜだかご存知ですか。それはこのポジティブな言葉や親切な行為がわたしたちの体内に“幸せホルモン”を分泌増加させる刺激を与えてくれるからなのだそうです。セロトニンやオキシトシンに代表されるホルモンです。オキシトシンは“愛情ホルモン”とも呼ばれています。愛情あふれる言葉や感謝の言葉がわたしたちの脳に刺激を与えこのホルモンをより多く分泌させるというメカニズムがわたしたちの体内にあるのです。みなさんが誰かにありがとうを言うとその言葉は自分の耳にも聞こえてきます。その行為は相手だけでなく自分も幸せにするという二重の効果があるわけです。ここにご参加のみなさんはこのような幸福な生き方をすでにご存じだと思います。もしみなさんの周りに自分自身への不満、悲しみ、痛み、怒りで毎日を悶々と暮らしておられる方がいらっしゃるのでしたら、別の生き方もあることをお話ししてくださいませんか。そうすれば人生の最期には気持ちの整理ができて、心が安らかになることでしょう。ポジティブな付き合い方をすることで相手にも自分自身にももっと喜びが増えてくるでしょう。このような生き方がわたしたちの魂を洗い清める方法で、この過程が精神浄化 Catharsis です。アリストテレスが彼の著作ポエティカ（詩学）の中に感情の浄化という意味で Catharsis という言葉を使いました。若輩者のわたしは今自分自身がこの過程のただなかにいるのではありますが、今回の対話の会でこれをテーマに挙げさせていただきました。それはただみなさんと周りの方たちに、より幸せな魂でこの素晴らしくかけがえのない人生を過ごしていただきたいという願いからです。
わたしはここにいらっしゃるみなさんを心から尊敬しています。これからも共に幸せに向かって歩んでいきましょう。

閉会の辞

村岡崇光

綿貫さんはご自分が日本人であることを意識しつつ、またオランダ人と結婚されていて、旧東インド出身のオランダ人たちが日本人に対して抱いている厳しい感情をもろに受けながらこの国で生きてこられました。長いこと財団サクラとも関わってこられ、2012 年からは、最近立ち上げられた SOO というオランダのグループの理事会にも席を連ねておられます。今年、96 歳になられるというブーヘルさんという方で、昭和２０年８月９日に長崎に投下された原爆の放射能に曝されたかつての捕虜の方の体験について感動的なお話を私たちは伺いました。また、ヘンククレインさんからは、この原爆が投下された時に同じくオランダ人捕虜としてその場におられて目撃された有様を生々しく語ってくださいました。幸いにもクレインさんは生き延びられました。ここで、本当の加害者は、オランダの同盟国であった米合衆国です。しかし、ブヘルさん、クレインさんその他多くの捕虜は、だいたい、そこにいてはならないはずでした。日本が、長崎をはじめ日本各地に戦争捕虜を輸送して使役するのは当時の国際条約上不法行為でした。

綿貫さんによれば、人間は誰しも幸せな人生を送るべきだ、ということです。幸せとは何を意味するのかを私たちはちゃんと知っている、と想定しておられるのかもしれません。確かに、悲しい、惨めな気持ちを抱きながら日を送るよりは、楽し

い方が良いという意味では私たち誰にも異論はないでしょう。でも、自分の伴侶、あるいは身内の者が死んだ時は、悲しみを噛みしめる時があってもいいのではないでしょうか。自分の伴侶の葬式に出て、始終ニコニコしていたら出席者から顔をしかめられるでしょう。私ども夫婦は、先月、南京の虐殺記念館を訪ねました。８年前にも行きましたので、今回は二度目でした。私たちの前の世代の日本兵たちが行った残虐行為、蛮行の数々に関わる何百という展示の前に立って、私は微笑することも、クスクス笑うこともできませんでした。そうしようものなら周りにいる大勢の中国人たちから蹴飛ばされたことでしょう。ある部屋の壁に身の毛もよだつような写真がかかっていました。揚子江の岸に投げ出された何十という中国人の死体の山でしたが、その中に裸の女性がいました。日本兵がしばしば行ったように、強姦してから殺害したのでしょう。そして、その傍らに幼い男の子が泣きながら立っているのです。いたたまれなくなるような光景でした。何万人という中国人、老若男女の南京市民が情け容赦もなく虐殺され（記念館の中国語の名前には「屠殺」となっています）、銃殺、射殺、斬殺され、その死体は石油をぶかっけて焼かれたり、川に放り込まれたり、生き埋めにされたり、あるいはこのようにほったらかされて、腐敗するに任されました。こういった犠牲者たちに比べれば、今の平和の時代、自分の伴侶、親、あるいは子どもがきちんとした葬儀をして、埋葬してもらえるのは幸せだ、と言うべきなのかもしれません。

財団日蘭印対話の会に連なる私たちは、近い過去の歴史を共有する者として、このような厳しい、辛い過去の現実を直視し、これに対処し、その上で、本当に幸せな、充実した人生を築いていくことを学ばなければなりません。スクラムさんは、無事に生還はされたものの、捕虜として日本へ連れて行かれて強制労働をさせられた辛い体験の持ち主であるお父上のことを思いながら収容所福岡第二分所に記念碑を建設することを支持してこられた者として、昨年完成したことに大きな喜びと満足感を表明されましたが、それは、この記念碑が私たち日本人の前の世代によって当時の捕虜たちに加えられた不当な苦しみと痛みの辛い記憶を後世に残し、私たちがそのような過去の歴史に対処していくための助けになる、と彼は思っておられるからです。過去を忘却の淵に沈めることがあってはならないのです。記念碑の建立にあたっていろいろな方面から貢献された日本人たち、POW 研究会のような団体に対する謝意を表明することもスクラムさんは怠られませんでした。また、私どもの財団の理事会議長の疲れを知らない献身ぶりを示されたタンゲナさんにもお礼の言葉を添えられました。私どもの財団が細やかながら寄付金を支払えたことも私たちにとっては喜んでいいことです。

笹本さんは、人間のこの地上での生の終焉を見つめるところから目が開け、日本人として日本にいるということが何を意味するのかを悟るに至られたのでしょうか。もう２０年も前、横浜のご自宅の近くにある英国人戦死者墓地に眠る千七百二十人余りの英連邦諸国の兵士たちの墓を覗き込むのではなく、彼らの過去を辿ることから始まりました。この兵士たちは、日本本土での戦闘で倒れたのではなく、国外から捕虜として連れて来られたのでした。遺族にしてみれば、遺体は祖国に埋葬してもらいたいのはやまやまだったでしょうが、当時の状況に鑑みれば、異国とはいえ、このようにしてきちんと葬ってもらえたのは、この兵士たちとしては幸いであったのかもしれません。笹本さんの好奇心とこの軍人墓地の過去への探求から POW 研究会との関わりが結果しました。

笹本さんが長年事務局長を務めてこられたような団体が日本にあって、国外では入手が困難であったり、日本語で書いてあるような資料を収集する事業が行われているということは嬉しいことです。そのような資料は日本で他界された外国人兵士たちの遺族にとっては極めて貴重なものです。また、この団体は、遺族が日本を訪問されたような時にもいろいろな援助の手を差し伸べており、彼らが戦後世代の日本人たちと出会い、交流することを通して、恨みや憎しみの気持ちが和らいで帰国される場面に出くわすと、笹本さんやその同僚たちは本当に「幸せ」を実感されるそうです。さらにまた、彼女たちの団

体は、近年オランダにもその活動範囲を伸ばし、オランダ在住の前川佳遠理さんとも連携して、日本で他界されたオランダ人兵士たちに関する個人情報のデータベースの作成が始まっています。これも、長崎の福岡俘虜抑留所第二分所後に昨年除幕式が行われた記念碑の建立と相まって嬉しい展開であります。

四人の方のお話を拝聴し、また小グループでの話し合いに参加してみて、この私たちの群れは、そう遠くない過去の歴史を共有する三つの国の者たちが相互に近寄れるために意義深い役割を果たしている、と言って良いかと思います。財団理事会の皆さんの働きが今後とも着実な進歩を刻んで行けるように祈念します。第１９回対話の会を準備してくださった理事会の皆さん、また遠く日本から駆け付けてくださった笹本さん、その他にもいろいろな場で話をしてくださったり、討議の司会をしてくださった方々に対してこの場においでの皆さんに代わって心よりお礼申し上げます。お一人お一人、お気をおつけになってお帰りください。